



稲の遺伝研究の文化功労者

高橋 萬右衛門

高橋萬右衛門は、長い間、植物育種学や遺伝学の研究に努めた。

特に稲の遺伝学研究では、育種の世界初の技術開発を行い、寒さに強い稲作りや病気に強い稲作りに役立だった。この功績に対して日本育種学賞や日本学士院賞を受賞した。また、稲と大豆を細胞融合させ、新しい品種の雑種カルスをつくり、世界の学界から注目を浴びた。そのほかにも、細胞融合や遺伝子工学を育種技術へ取り入れるための研究を進展させ、農業技術の向上に大きな貢献した。一九八二年（昭和五十七年）には、北海道文化賞、一九九二（平成四年）には北海道開発功労賞が授与された。

北海道大学名誉教授を定年退職してからは、二つの大学の学長を務めたり、バイオ研究所の初代所長にもなった。また、日本育種学会会長や評議委員を務めるなど学術研究の推進に大きく貢献した。一九八七年（昭和六十二年）には、日本学士院会に選出され、一九八九年（平成元年）勲二等旭日重光章が授与され一九九五年

（平成七年）には文化功労者に選ばれた。

高橋萬右衛門は、世界の農業技術を高める研究を一生涯をかけて行い、その功績は目に見えないところで、現在の豊かな食生活を支えている。

高橋萬右衛門は一九一八年（大正七年）一月二十六日、現在の水沢区に、高橋丑治と花枝の長男として生まれた。下に二人の妹がいる三人兄弟であった。

「萬右衛門」という名前は、親戚の「萬右衛門」という先代が亡くなった日に生まれたことから、その生まれ変わりということと命名されたという。

生まれてからは、父の務めている茨城県に一時暮らしたが、妹が生まれてからは、小学校まで祖父母の住む水沢で過ごした。水沢では自然児として自由奔放に育った。春はタニシをひろい、セリをつみ、夏はシヨウブをとり、螢を蚊帳に入れ、秋は栗ひろいときのこと、冬は炉ばたで昔話に耳をそばだてる毎日毎晩であった。いつまでも忘れることのできない楽しい思い出となった。

父親の転職によって、仙台の小学校に入学したが、ほとんどの子供は、入学前に自分の名前ぐらいいは書けるが、萬右衛門は、十日間ほどの特訓で「タカハシ」がやっと書けるようになっただけであっ

た。したがって学校は面白くなく、肺炎にかかった高熱の苦しみに上に、学校に行かなくていいことのほうがうれしかった。

小学校に入学して間もなく、子どものいなかった実の母の養子となった。しかし養母は三十四歳の若さで亡くなり、実父母のいる札幌の小学校で後半を過ごすことになる。

中学校時代は飛行機が好きで、修学旅行では一人でわざわざ羽田まで行き、外国の飛行機を見ては感激した。七十歳を過ぎても飛行機などの型でも即座に暗記でスケッチを描いてみせることができるほどであった。

将来の航空エンジニアを夢見ていたが、祖父の遺言により農業を学ぶことになり、北海道帝国大学大予科農類に進むことになった。

これがその後の人生を決めることとなった。大学では油絵を描いたり、冬はスキートの合宿に出かけたりした。グライダーの操縦にも熱中した。

好んで入った農学の道ではなかったが、「実験遺伝学」という本に出会って、植物遺伝学の虜になってしまった。やっと学ぶ道をさがしあてたという思いであった。

これをきっかけに育種学教室に入り、毎日交配実験に目のまわる忙しさであった。一九四〇年（昭和十五年）卒業と同時に北海道帝

国大学助手になり、農学部農学科育種学教室勤務を命じられた。

毎日、研究で忙しい日々であったが、太平洋戦争が始まっており、二度の召集を受ける。一回目は野砲兵として国内勤務、一時所召集をとかれ、教室にもどったが、二度目は山砲兵として召集され、中国大陸の戦線に送られた。

幻の作戦といわれる芷江作戦にくわわった。芷江方面の航空基地や、工業都市重慶を攻撃しようとする作戦である。無謀な作戦で、多くの日本兵が、アメリカ軍の爆撃機から投下される焼夷弾という爆弾で焼け死んだ。

高橋萬右衛門の部隊は常に最前線へ送られ、いつも死と隣り合わせであった。日本兵のかくれている穴の上は火の海になり、たくさんの日本兵が、焼けて苦しみながら死んでいった。

戦友の多くも同じように飛び散る油とそれを追いかける炎につつまれ焼け死んでいった。炎と化した山や谷、無残な戦友の遺体、それらの光景を一生忘れることはできなかった。

四年以上たっても、その光景を夢にみて、うめき声をあげて、妻を気持ち悪がらせるのであった。

戦争が終わってからも、中国の内戦に巻き込まれ、多くの戦友を失いながら、山東省の青島というところにたどりつき、アメリカ

軍の大型船に乗った。マラリア病に悩まされながらも長崎県の佐世保港に着き、生きて日本の土を踏むことができた。戦場での三年間、どれほど日本の山河を夢見ていたかしのれない。緑の山河を見て涙がとめどなく流れ、母国の地を踏んだ実感に感動した。

生きて水沢に戻ったが、萬右衛門が戦死したとの知らせを受けて父親は、萬右衛門の残してあった物を知りあいや学生らに形見の意味をこめて分け与えていた。住宅も処分し、父親も北海道での仕事を辞めて水沢にもどってきていた。

誰もが死んだはずと思っていた萬右衛門が生きて帰ってきた姿を見て、母は「光を見たようだ。」と語り、父親は「これでお前も一人前になったな。これから万事やりなおして行こう」と語った。

数週間の静養の後、北海道大学にもどった萬右衛門は周囲の助けもあり、種子学の研究に力を入れることができた。一九四七年（昭和二十二年）には助教教授になり、一九四九年（昭和二十四年）には、江刺出身の妙子と結婚した。妙子は萬右衛門の研究を理解し縁の下の力持ちとしてよくささ支えた。

その後教授となり、稲に関する研究を中心に、遺伝学に関する多くの研究を行った。研究室と田んぼを行き来し、観察し、仮説をもとに実験を仲間と繰り返し、植物の遺伝の仕組みを説明していった。

研究論文を残すとともに研究発表や講演活動も行っている。論文は英文にも翻訳され、外国の研究者からも称賛された。

これらの基礎研究が、おいしい米・寒さに強い米・害虫に強い米の品種改良に役だった。また、他の品種にも応用され、おいしくてたくさん収穫できる品種をうみだすことができた。

現在のよう、少ない面積で、育てやすい、おいしい米がたくさんとれるのは、このような地道な研究が行われたからである。

一九八九年（平成元年）には、長年の功績が認められ、天皇陛下より勲二等旭日重光章受賞した。一九九五年（平成七年）には、文化功労賞に選ばれ、天皇陛下より

「日本のみならず世界の今後の食糧問題に力をつくすように」

というおこと言ば葉をいただき、

「自分がこのような栄誉に値するとは思えず、ありがたさよりも空恐ろしさに身も心もふるえる心境であった。」

と語っている。

萬右衛門の長年の研究は、間接的ではあったが、世界の多くの飢えに苦しんでいる人々を助けることになっている。

同年、北海道グリーンバイオ研究所名誉所長の職を最後にして、水沢で妻の妙子と静かに余生をおく送り、二〇〇四（平成十六年）

六月五日、八十六歳で亡くなった。

参考文献

『緑の地平線』高橋 萬右衛門の歩んだ道

著者 高橋 萬右衛門 自費出版

